

# 熊野の歴史

(研究ノート・第2号)

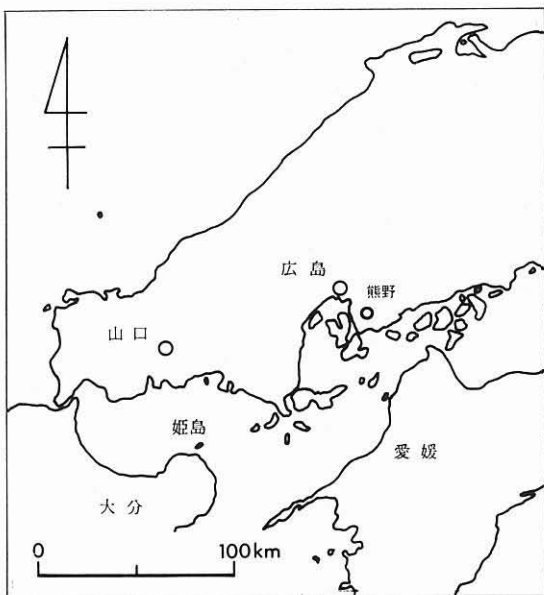
# 熊野町の遺跡と遺物

河瀬 正利

## 一、はじめに

広島県安芸郡熊野町は、広島市の東南、直線距離で約一五キロメートルの台地上に形成された町である。町域の南側は、南流する二河川、また北側は、北東に流れて瀬野川と合流する熊野川の最上流域にあたっており、二つの河川の分水嶺付近には、川の流域に沿って、標高約二〇〇メートルをこす谷底平野である熊野盆地が北東から南西方向に形成され、盆地の周囲には、洞所山や金ヶ燈籠山、石岳山、絵下山など五〇〇～六〇〇メートル以上の山塊が連なっている。広島県地質図（一九六三年）等によれば、熊野台地は、白亜紀の流紋岩類と花崗岩類とからなり、また、盆地周辺の山麓部には、西条砂礫層と呼ばれる湖成層の発達が認められている<sup>(1)</sup>。

熊野町周辺においては、地形的に古い時代の遺跡・遺物の存在が早くから予想されてきた。例えば、熊野町大字呉地ハグイ原発見の有莖尖頭器<sup>(2)</sup>や昭和三三<sup>(3)</sup>年ごろに発見されたといわれる呉市焼山町出土の有莖尖頭器<sup>(2)</sup>、また、昭和四五年に調査された呉市郷原町の郷原遺跡<sup>(3)</sup>など旧石器時代末期から縄文時代前期・中期の遺跡の存在は、このことを裏づけるものであろう。しかしながら、熊野町域においては、いままで考古学的な調査が実施されたことがなく、最近まで遺跡・遺物の分布状況については、不明な点が多かった。昭和三六年に刊行された『広島県



第1図 熊野町位置図

埋蔵文化財包蔵地名表<sup>4</sup>には、未踏査のためか熊野町内での遺跡・遺物の記載はない。また、その後昭和五七年に刊行された『全国遺跡地図』<sup>5</sup>でも古墳一、古墓四、城跡六、散布地四の計一五か所の遺跡が登録されているにすぎない。

ところが、昭和五五年に熊野町史の編纂が計画されたのを機に、文化財の保存への機運はしだいに高まりをみせ、町教育委員会の竹之内哲郎氏らによる遺跡分布調査が積極的に行われるようになると、つぎつぎと新しく遺跡・遺物が発見されるようになってきたのである。現在までに五〇か所以上に及ぶ遺跡が確認されている。今後踏査が進めばその数はさらに増えてくるものとおもわれる。

発見された遺物は、大部分のものが表面採集によるものであり、出土層位や状況の明らかなものはない。しかし、旧石器時代末期から近世にいたるものまでが含まれており、熊野の歴史を考古学的に明らかにしていく上で、貴重な資料となるものであろう。

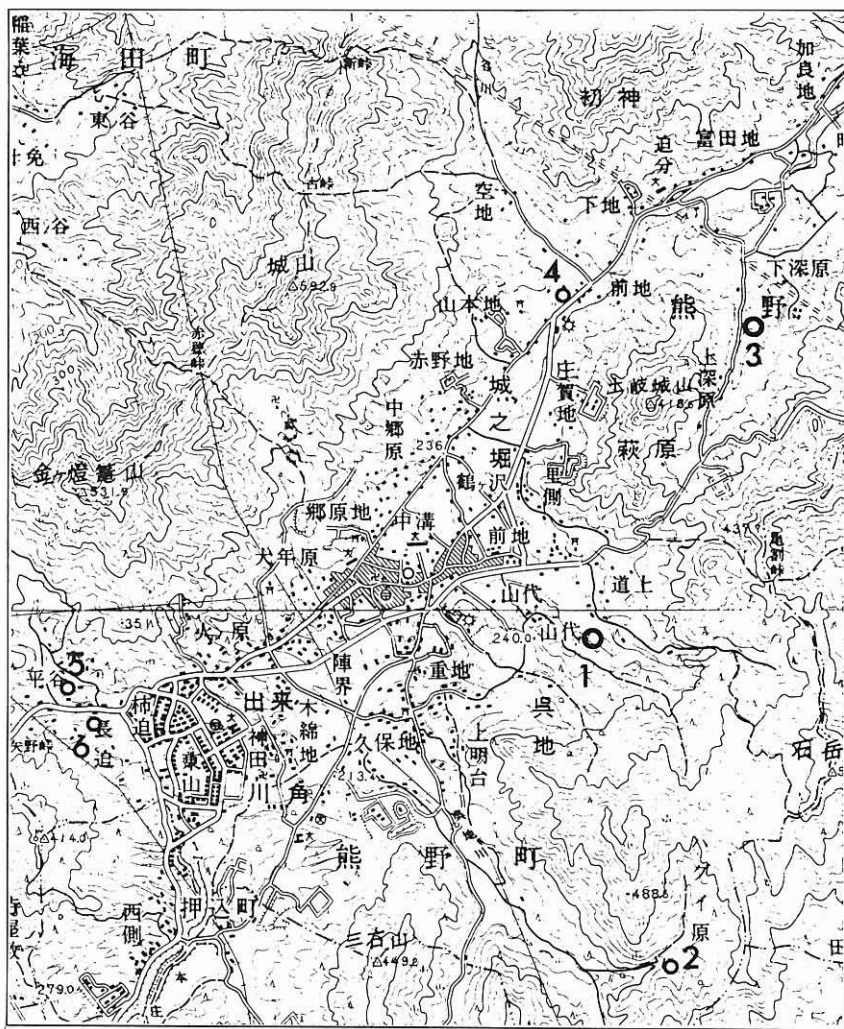
本稿では、とりあえず現在までに確認された熊野町の遺跡の分布と遺跡から採集された主要な遺物について紹介してみたい。作成にあたっては、多くの方々から貴重な資料の提供や御教示をうけた。特に竹之内哲郎氏

には、遺跡踏査にあたり、案内を願ったとともに、町内の遺跡について数多くの御教示をうけた。また、広島大学文学部の潮見 浩先生には、全般についての御教示を受け、理学部の沖村雄二先生には、石器石材の同定をお願いした。藤野次史氏には、石器についての御教示と石器の実測に一部御協力いただいた。なお、石材の産地分析は京都大学原子炉実験所の藁科哲男氏をわずらわせた。記して謝意を表したい。

## 二、遺跡の分布状況

町域で確認された遺跡は、現在までのところ五〇か所以上に及んでいる。地区ごとの分布をみると、つぎのようになっている。<sup>6)</sup>

平谷地区（柳ノ本遺跡・九ノ通遺跡など）	五か所
川角地区（上ノ山遺跡・木綿地遺跡など）	三か所
出来地区（大水南地遺跡・地藏の前遺跡など）	五か所
呉地区（ハグイ原遺跡・八幡風呂遺跡など）	八か所
中溝地区（坂面大池遺跡・白石遺跡・重地遺跡など）	六か所
萩原地区（道上遺跡・狐城遺跡など）	七か所
城之堀地区（堀之城跡・山本地遺跡など）	五か所
初神地区（畦地遺跡・岡遺跡など）	三か所
新宮地区（東深原遺跡・宮林古墓など）	八か所



第2図 主要遺跡分布図 (海田市・尺 1:50000)

- |           |          |
|-----------|----------|
| ( 1. 道上遺跡 | 4. 畦地遺跡  |
| 2. ハグイ原遺跡 | 5. 九ノ通遺跡 |
| 3. 東深原遺跡  | 6. 柳ノ本遺跡 |

これらの遺跡は、城跡などを除くと、その多くは盆地縁辺の低い台地上に位置している。このような地域は、丘陵の先端部で小字名として「○○地」と呼ばれるところが多く、やや小高い地形となっており、低地との比高も五〜二〇メートル前後の地域である。

これらの遺跡・遺物のうち、旧石器時代末から縄文時代のものともみられるものは、柳ノ本遺跡やハグイ原遺跡、道上遺跡、畦地遺跡、東深原遺跡などがあげられる。後述するように柳ノ本遺跡では縄文時代の石器、剝片類が多数採集されており、ハグイ原遺跡からは、有茎尖頭器が、また、東深原遺跡では、局部磨製石斧や磨製石斧などが採集されている。道上遺跡では、縄文時代の石器、剝片、チップ類、縄文式土器などが採集されている。これらの遺物からみると、旧石器時代の終りごろ（約一万年ごろ）には、すでに人々が熊野台地周辺でも生活しはじめたことをうかがわせる。

弥生時代の遺跡では、大水南地遺跡や白石遺跡、狐城遺跡などがある。白石遺跡では、石鏃、石錐のほか弥生式土器が採集され、大水南地遺跡では、水田の畦畔から弥生式土器が出土している。また、狐城遺跡では、丘陵先端部の崖面に弥生後期と推定される土器包含層の一部が露出している。いずれも弥生時代中期から後期の遺跡とおもわれる。

つぎの古墳時代の遺跡、遺物については、未だ明らかでない点が多い。昭和五七年に住宅建築に先立って調査された岡遺跡では、丘陵の崖面に地盤の落ちこむところが観察され、古式の土師器などが採集されていることから住居址などの遺構が存在するものと推定された。しかし、調査の結果では、遺構は検出できなかったとされる。また、『全国遺跡地図』によると、新宮に東米山古墳が存在したとされているが、古く破壊されており現存しな

い。このように古墳時代の遺構は、現在までのところ明らかでないが、岡遺跡発見の土師器や出来地区の大蔵遺跡から採集された須恵器片からみて、今後、遺跡・遺構の発見される可能性はきわめて強いといえる。

さらに、古墳時代以降の遺跡には、城之堀地区の堀之城跡、萩原地区の土岐城跡、平谷の的場城跡、土居屋敷跡などの中世山城に関連する遺跡や備前小壺二点や磁器などが出土した新宮の宮林古墓などがある。これらについては、広島市矢野町の絵下山の矢野城に拠った野間氏との関係で把握すべきものであろう。

以上、熊野町の遺跡分布の概況を大まかにみてきたが、先述したように発掘調査された例は皆無にちかく、細かな内容については、今後の調査の進展を待たねばならないところが多い。

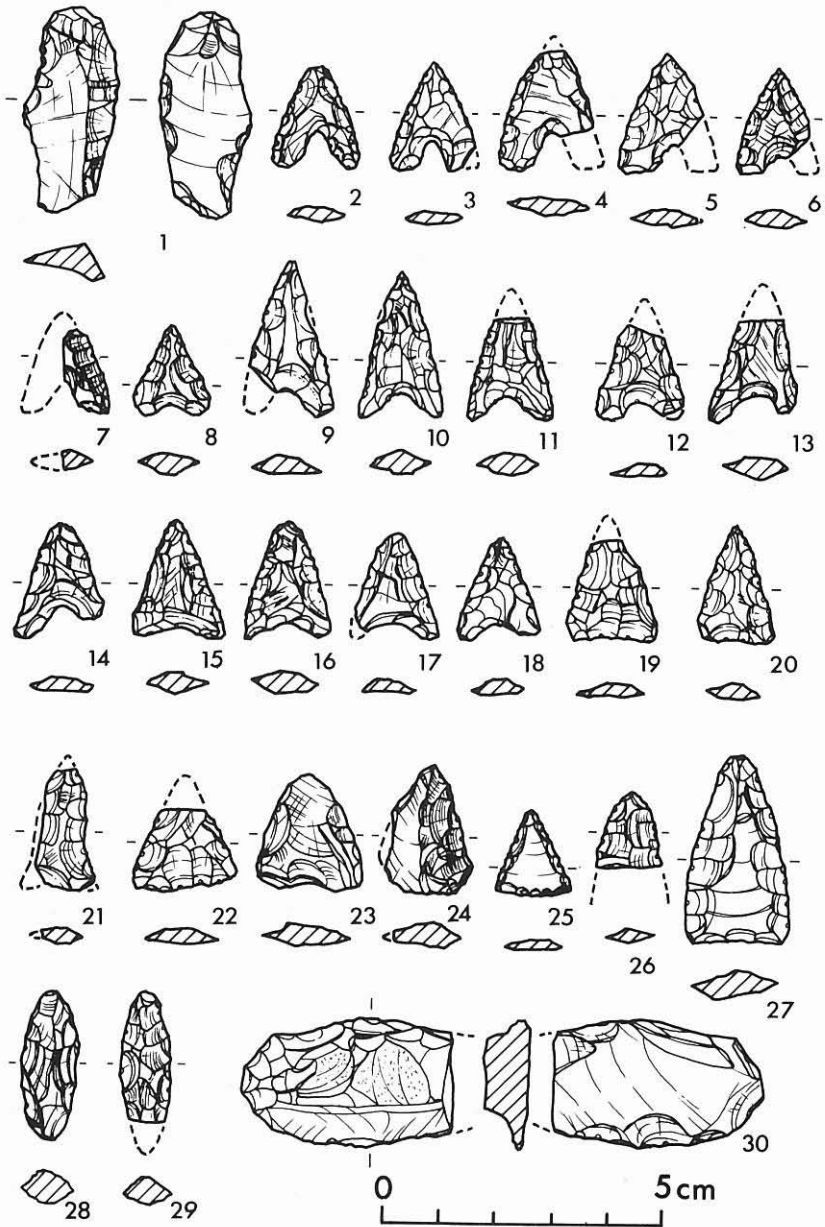
### 三、遺跡・遺物の概要

つぎに、町内の主要な遺跡と採集遺物について検討してみたい。

#### (1) 道上遺跡 熊野町大字萩原字道上

石嶽山（標高五三二メートル）から北へのびる丘陵の先端部に位置し、標高は二三〇～二四〇メートル、低地との比高は、約一〇メートルである。遺跡の前面には、熊野川の支流の道上川が東から西へ流れており、川沿いに狭い水田や畑がつくられている。遺跡は、南から北へのびる低い丘陵の先端部の東側から北側にかけての緩斜面にひろがっているものとみられ、かなり広い範囲から遺物が採集されている。

遺物には、石器、剥片類と縄文式土器などがある。石器には石鏃、刃器などがあり、石材としては、安山岩製のものと半透明の乳灰色をなす姫島産黒曜石製のものを主体とする。このほかに漆黒色の黒曜石製（島根県隠岐



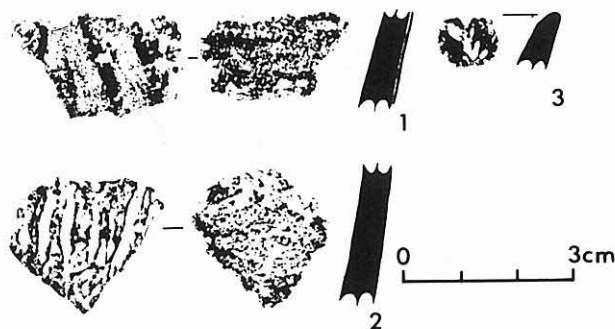
第3図 道上遺跡の石器



第1表 道上遺跡の石器一覧表

第3図番号	種別	長さ(cm) ( )は推定	幅(cm) ( )は推定	現存(g) 重量	石材	備考
1	剥片石器	4.0	1.6	3.3	姫島産黒曜石	一側縁調整 縦長剥片
2	石 鏃	1.8	1.5	0.6	安山岩	両面加工 周辺剝離
3	〃	1.9	1.6	0.6	〃	〃
4	〃	(2.4)	(1.9)	0.8	〃	〃
5	〃	2.1	(1.6)	0.6	〃	全面剝離 両面加工
6	〃	1.9	(1.4)	0.6	水晶	周辺剝離
7	〃	(1.8)	(1.6)	0.3	姫島産黒曜石	両面加工 全面剝離
8	〃	1.6	1.4	0.4	安山岩	〃
9	〃	2.8	(1.6)	0.9	〃	両面加工 周辺剝離
10	〃	2.6	1.5	0.9	〃	両面加工 全面剝離
11	〃	(2.3)	1.5	0.9	〃	〃
12	〃	(2.2)	1.6	0.5	〃	片面加工 全面剝離
13	〃	(2.5)	1.6	0.8	〃	両面加工 周辺剝離
14	〃	2.1	1.6	0.7	〃	〃
15	〃	2.1	1.7	1.0	〃	〃
16	〃	2.1	1.5	1.0	〃	〃
17	〃	1.9	1.6	0.6	〃	片面加工 周辺剝離
18	〃	1.9	1.5	0.6	〃	両面加工 周辺剝離
19	〃	(2.3)	1.6	0.8	〃	両面加工 全面剝離
20	〃	2.2	1.3	0.7	〃	〃 周辺剝離
21	〃	(2.4)	(1.5)	0.7	〃	〃 全面剝離
22	〃	(2.0)	1.9	0.7	〃	〃
23	〃	2.1	1.9	1.5	〃	〃 周辺剝離
24	〃	2.3	(1.6)	1.3	姫島産黒曜石	未成品、側 縁のみ調整
25	〃	1.5	1.5	0.3	安山岩	両面加工 周辺調整
26	〃	—	—	0.3	〃	〃 全面剝離
27	〃	3.3	1.9	2.8	〃	〃 周辺調整
28	〃	2.7	1.0	1.5	〃	〃 両面加工 凸基式
29	〃	(2.9)	0.8	0.8	姫島産黒曜石	〃
30	刃器?	(3.8)	2.3	9.4	安山岩	上端に打痕 両面に剝離 面のこぼ

島久見産出)のものも一点ある。第3図1は、加工痕のある剥片石器<sup>(8)</sup>で、縦長<sup>(たてなが)</sup>の剥片を素材とし、一方の側縁に調整がほどこされている。上面が打面となっている。石鏃(2~29)は、基部の特徴から、基部に抉りのあるもの(凹基式)、基部が直線的なもの(平基式)、基部が尖るもの(凸基式)の三種がある。基部に抉りのあるグループには、抉りが深くて三角形にちかいもの(2~7)と細身で抉りが浅く二等辺三角形にちかいもの(9~



第4図 道上遺跡の縄文式土器

18) がある。採集資料のため石鏃の時期を限定することは困難であるが、2・7のように三角形にちかく両脚が角状をなし、抉りが深く丸くなる形態のものは、押型文土器と伴出することが多く縄文早期(約八〇〇〇年前ごろ)のものとして推定される。また、21のように側縁が内反りで、上部に段をもつものは縄文晚期(約三〇〇〇年前)の特徴をもっている。28・29のように基部の尖るものは、周辺地域では類例に乏しいが、岡山県羽島貝塚や

里木貝塚<sup>(10)</sup>、広島県呉市の郷原遺跡<sup>(11)</sup>などの出土例からみて縄文前期(約六・七〇〇〇年前)ごろのものとみられる。なお、基部の平坦なものの中には、調整がやや粗く弥生時代のものともみられるものも存在する。30は刃器で一側縁に調整が加えられ刃部となっている。石器の多くは縄文時代に所属するものとしてよいが、石鏃でみると古い様相のものと新しい様相のものを含んでおり、長い期間にわたる遺跡と推定される。

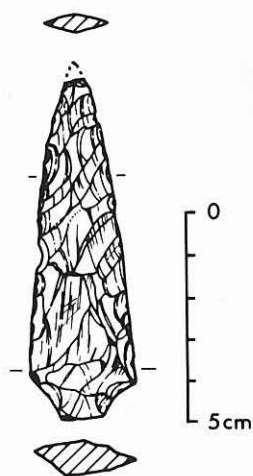
縄文式土器(第4図)は、三点採集されている。1は黒茶色を呈し、胎土<sup>(たど)</sup>に〇・五〜一ミリ前後の砂粒を少量含んでいる。器表には、ミミズバレ状の隆帯がめぐらされ、内面は条痕調整<sup>(じょうこん)</sup>である。2は表面に縦位の条痕がほどこされている。黒茶褐色を呈し、焼成はよい。3は鉢形土器の口縁部で、口縁部付近に縄文がほどこされているのが、わずかにみとめられる。細片のため時期は明瞭にできないが、

1は縄文前期、2・3は後期(約四〇〇〇年前)ごろのものと推定される。

道上遺跡は、遺物からみて縄文時代早期から弥生時代にかけての遺跡と推定される。石器、剝片類では、石材として安山岩と姫島産黒曜石が主に使われているが、姫島産黒曜石の占める割合は、広島湾周辺の縄文時代遺跡における姫島産黒曜石の占める割合に比べて、非常に高いことは注目される。姫島は、大分県国東半島の沖に浮ぶ小島であり、広島近辺からは、直接距離にして約一〇〇キロメートルの遠隔な地に位置する。素材となった黒曜石は瀬戸内沿岸の遺跡を中継して、間接的に熊野台地にもちこまれたものであろう。縄文式土器では、隆帯のめぐらされたものと条痕のめぐらされたものがあった。隆帯のめぐらされたものは、瀬戸内地域では、山口県月崎遺跡<sup>(12)</sup>、神田遺跡<sup>(13)</sup>、黒島浜遺跡<sup>(14)</sup>や広島県太田貝塚<sup>(15)</sup>、帝釈観音堂洞窟遺跡<sup>(16)</sup>、冠遺跡C地点<sup>(17)</sup>などから出土している。九州熊本県の轟遺跡<sup>(18)</sup>出土の土器にちかい特徴をもっており、縄文前期のものと推定される。

## (2) ハグイ原遺跡 熊野町大字呉地字ハグイ原

熊野町の南端にちかい標高三二〇〜三三〇メートルのところにある呉地ダム(呉地大池)付近に位置し、二河

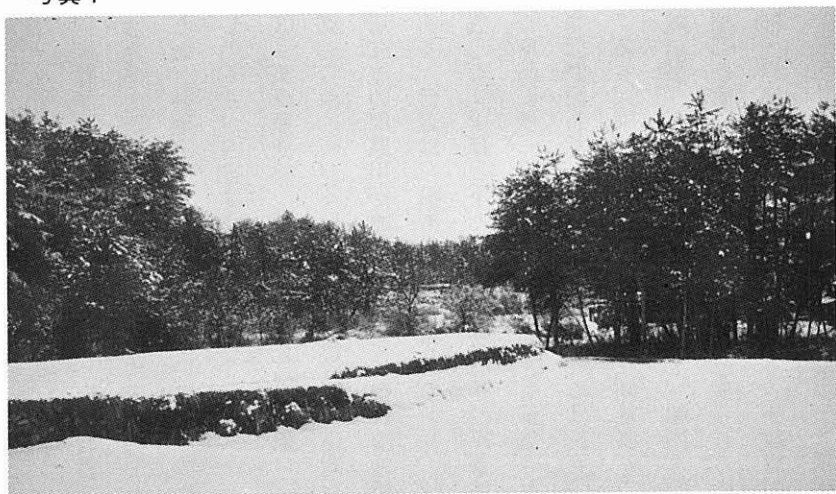


第5図 ハグイ原遺跡の有茎尖頭器(潮見浩氏原図)

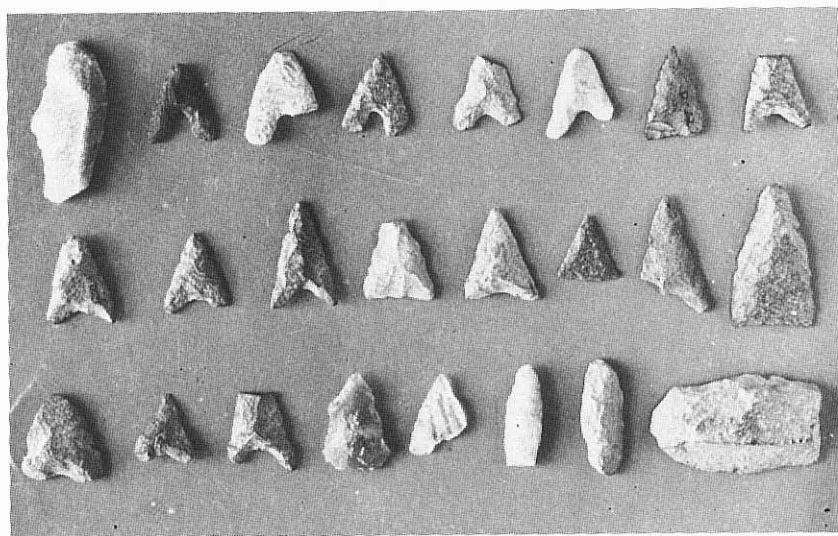
川支流の呉地川からの比高は八〇〜一〇〇メートルである。呉地ダムの工事中に有茎尖頭器一点が採取されているが、現在、遺物は不明となっている。

有茎尖頭器(第5図)は、先端部をわずかに欠失するが、現存で長さ八・二センチ、幅二・五センチ、厚さ〇・八センチで、断面は菱形をなしている。槍先として使

写真1



a. 道上遺跡近景



b. 道上遺跡の石器

われたものであろう。柳葉形を呈し、基部には短かい逆刺をもち、長さは一・〇センチである。両面とも長細の平行剝離調整がほどこされておられ、安山岩製である。工事中の単独出土であり、伴出遺物は不明であるが、形態からみて土器出現以前の旧石器時代末（約一万年前）ごろのものであろう。

なお、呉地字オノ神の呉地川沿いの河岸段丘上からも有茎尖頭器一点が出土したといわれているが、遺物が散逸しており、内容は明らかでない。

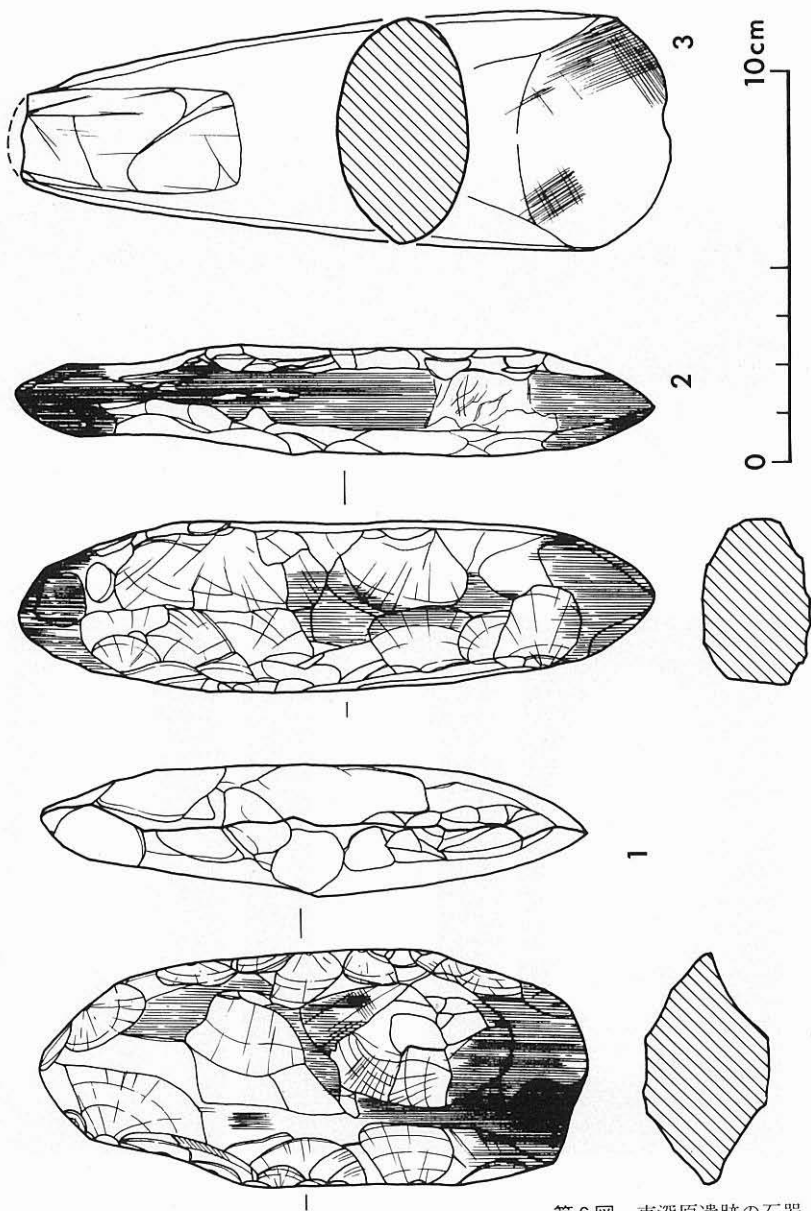
### (3) 東深原遺跡 熊野町大字新宮字深原

東から西へのびる丘陵の西側緩斜面に位置し、標高は約二三〇メートルである。遺跡の西側は、南から北へ熊野川支流の深原川が流れ、川沿いに狭長な沖積地が形成されている。遺跡と深原川との比高は、約一〇メートルである。付近は、植木の苗圃となっており、昭和五三年ごろに植栽のため丘陵斜面を掘り下げた際に、地表より約五〇センチほど下から局部磨製石斧二点が並んだような状態で出土したといわれる。また、場所は異なるが付近から磨製石斧一点、凹石、磨石なども採集されている。

局部磨製石斧（第6図1・2） 1は長さ一四・二センチ、幅六・一センチの長楕円形をなし刃部は丸く、両刃である。両面とも縁辺部に大きな剝離痕のこり、刃部両面から表裏両面中央部に研磨がほどこされている。

流紋岩製。2は長さ一六・四センチ、幅四・四センチの大型で両端が尖っており、石斧とするには疑問があるが、上端部が薄くなっており、着柄痕とみられることから、一応石斧として紹介しておく。両面とも全面剝離で、両端部と両側面がよく研磨されている。流紋岩製。

磨製石斧（第6図3）は、基部が少し欠損するが、長さ一六・七センチ、幅六・一センチ、厚さ三・四センチ

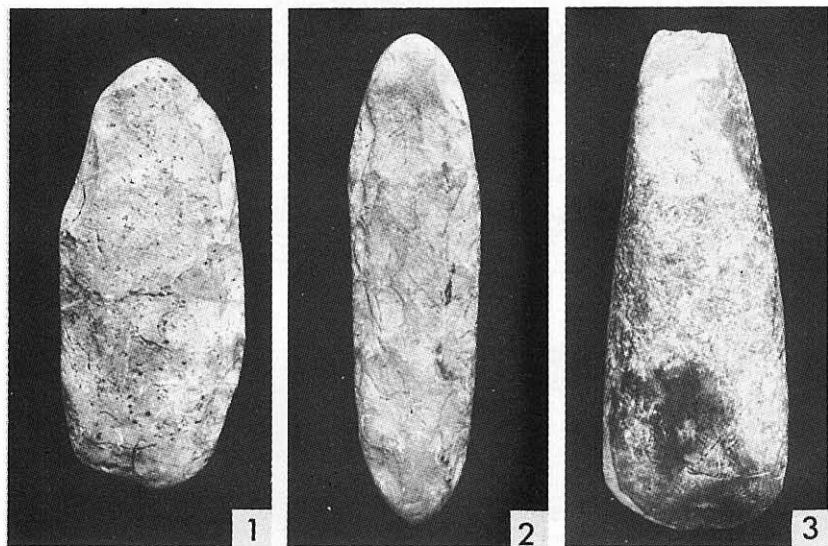


第6図 東深原遺跡の石器

写真2



a. 東深原遺跡近景

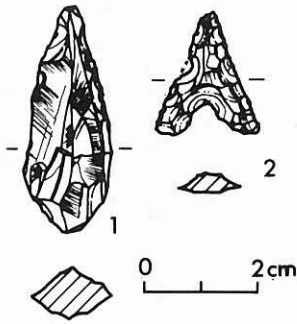


b. 東深原遺跡の石器

である。流紋岩製の扁平な石を使用しており、基部付近には自然面が残っている。刃部は丸く、両刃で刃部に使用痕とみられる細かな擦痕がみとめられる。全面ともよく研磨されている。基部の片面には、長方形のやや凹んだ部分がみられる。着柄のためであろう。

東深原遺跡は、遺物からみて旧石器時代末から縄文時代にかけての遺跡と推定される。局部磨製石斧は、いまのところ広島県内では類例はないが、周辺地域の出土例からすると旧石器時代末から縄文時代初頭のものと同推定される。しかし他の例の多くが研磨は刃部両面付近に限られているのに比べると、刃部両面から両面中央部に及ぶものや両側面にまで及ぶものが存在することは、石器磨製法が一歩進んだ段階のものともみることができ、時期的にはやや新しい時期のものかもしれない。磨製石斧については、形態的にみて縄文時代後期ごろのものとおもわれる。木材の伐り出しや加工に使用されたであろう。

(4) 畦地遺跡 熊野町大字初神字畦地



第7図 畦地遺跡の石器

西から東へのびる低丘陵の先端部に位置している。県道瀬野・呉線の北側にあり、標高約二二五メートル、前面南側を流れる熊野川からの比高は約五メートルである。丘陵先端部の畑から尖頭器一点、石鏃一点、土師質土器片などが採集されている。

尖頭器(第7図1)は、長さ四・〇センチ、幅一・五センチ、厚さ〇・九センチである。器体と基部の境は明瞭でないが、基部を逆二等辺三角形につくり出していることからすると有茎尖頭器とみる



ことができる。先端は鋭利さに欠けるが縁辺部に調整がほどこされている。背面と基部はほとんど未調整である。水晶製。2の石鏃は長さ二・二センチ、幅一・八センチの正三角形を呈し、基部の抉りは深い。安山岩製の縦長剥片を素材とし、両面とも加工調整がほどこされている。石鏃が三角形で両脚がひろがった抉りの深い形態のものは、押型文土器に伴出することが多く、縄文早期ごろのものとして推定される。

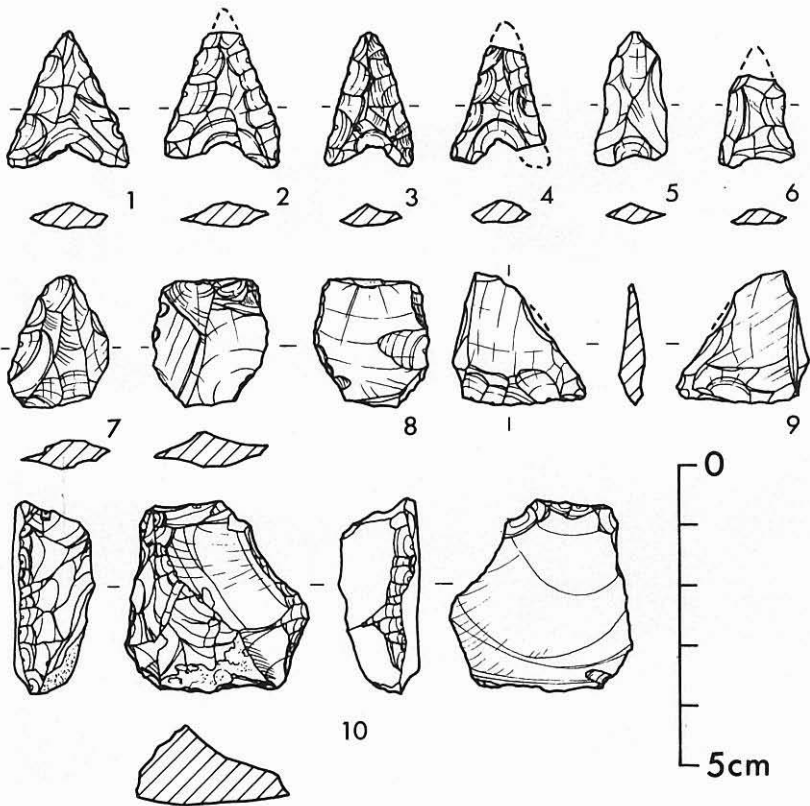
(5) 九ノ通遺跡 熊野町大字平谷字九ノ通

熊野盆地の西端で西から東南にのびる丘陵の先端部に位置し、標高約二五〇メートル、低地との比高は約一〇メートルである。水田耕作土中より石鏃一点、剥片類が採集されている。

石鏃(第8図1)は、長さ二・三センチの安山岩製の三角形にちがいを呈している。基部の抉りは浅く、両脚の端部は尖り気味にひろがっている。両面加工で縁辺の調整は細かく、裏面中央に主要剥離面が残っている。

第2表 九ノ通遺跡・柳ノ本遺跡の石器一覧表

第8図番号	種別	長さ(cm) ( )は推定	幅 (cm) ( )は推定	現存 (g) 重量	石 材	備 考
1	石 鏃	2.3	2.0	1.2	安 山 岩	九ノ通出土 両面加工、周辺剥離
2	〃	(2.7)	1.9	0.4	〃	柳ノ本出土 両面加工、周辺剥離
3	〃	2.2	1.5	0.6	姫島産黒曜石	〃、全面剥離
4	〃	(2.5)	(1.6)	0.4	〃	〃、周辺剥離
5	〃	2.2	1.2	1.0	安 山 岩	〃 調整粗い
6	〃	(2.0)	1.3	0.4	〃	〃
7	〃	2.2	1.7	1.1	姫島産黒曜石	未成品か、両面加工
8	加工痕ある剥片	2.1	1.9	2.3	〃	縦長剥片
9	刃 器?	2.2	2.2	1.6	安 山 岩	一側縁に調整痕、 両面に主剥離面のこる
10	刃 器	3.2	3.0	11.2	姫島産黒曜石	両側縁に調整痕 腹面は主剥離面



第8図 九ノ通遺跡1)・柳ノ本遺跡の石器

両脚のひろがった形態から縄文前期ごろのものである。このほかには、安山岩製・黒曜石製（姫島産）の剥片類が採集されている。

(6) 柳ノ本遺跡<sup>（柳本）</sup> 熊野町大字平谷字柳ノ本

熊野盆地の西端、広島市矢野町へ下る峠近くに位置する。東北にのびる丘陵の先端部に立地し、標高は約二三〇〜二四〇メートルである。遺跡の東側は、二河川支流の平谷川が南流しており、平谷川からの比高は、約一〇〜二〇メートルである。採集された遺物には、石鏃、刃器、剥片類が

写真3



1. 畦地遺跡(中央の家の前一带) 2. 九ノ通遺跡(中央右よりの水田一带)  
3. 柳ノ本遺跡(手前の畑一带)

あり、なかでも剥片、チップ類は大小あわせて一〇〇点以上に及んでいる。

石鏃（第8図2〜7）には、基部に抉りのある凹基式と抉りのない平基式とがあり、抉りのあるグループでは、二等辺三角形にちかく抉りのやや深いもの（2〜4）と抉りが浅く側近がやや内反り気味で上部に段のつく細身のもの（5・6）とがある。いずれも縄文時代のものとして推定されるが、後者は縄文晩期の特徴をもっている。8は加工痕のある剥片で長さ二・一センチである。縦長の剥片の両側縁に剝離痕がみられる。打面は上端にあり、黒曜石製である。9・10は刃器で9は安山岩製。10は黒曜石製で、両側縁に細かな調整が加えられ刃部を形成している。腹面には、主剝離面が残っている。動物の皮はぎや解体などに使われたものであろう。なお、採集された剥片のなかに漆黒色をなす黒曜石が一点含まれている。島根県隠岐島の久見産出の黒曜石製である。柳ノ本遺跡は、遺物からみて縄文時代の遺跡とみることができる。

#### 四、まとめ

熊野町に所在する遺跡のうち石器時代以前に遡ると推定される遺跡と採集遺物について概略を紹介してきた。さきにも述べたように、これらの遺跡・遺物は発掘調査によって明らかにされたものではなく、すべて表面採集によって収集されたものである。したがって各遺跡や遺物の細かな内容や所属の時期等については、今後の調査の進展や類例の増加を待つて検討すべきところが多いが、とりあえず遺物を中心に二・三の問題を提起して、まとめとしておきたい。なお、今回は触れなかったが、弥生時代以降の資料についても今後改めて紹介していく予定である。

縄文時代の遺跡とみられる道上遺跡、柳ノ本遺跡では、表採資料ではあるが多数の石器、剝片類が出土しており、なかでも石材として、姫島産の黒曜石の使用が多いことは注目される。広島周辺の縄文遺跡での姫島産黒曜石の出土例をみると、佐伯郡五日市町円明寺遺跡<sup>(20)</sup>（石鏃一）、廿日市町地御前南遺跡<sup>(21)</sup>（石鏃、刃器、剝片など約四〇）、宮島町広島大学植物園内遺跡<sup>(22)</sup>（剝片一）、五日市町三宅青木遺跡<sup>(23)</sup>（石鏃一）、佐伯町越峠遺跡<sup>(24)</sup>（剝片七）、安芸郡海田町畑谷貝塚<sup>(25)</sup>（石鏃一）、呉市郷原町郷原遺跡<sup>(26)</sup>（石鏃一）などがあり、縄文早期から後期に比定されるものが多い<sup>(27)</sup>。そして黒曜石の出土数は、地御前南遺跡のほかは一点ないし数点が出土しているにすぎない。これに対して道上遺跡では、石器、剝片、チップ数一八四点のうち、姫島産黒曜石は四三点で二三パーセント強を占めている。また、柳ノ本遺跡では一四六点中の一七点で約一二パーセントを占めており、地御前南遺跡（約三〇パーセントを占める）について、黒曜石の占める比率が非常に高いといえる。ただし、両遺跡とも出土黒曜石は、石鏃、スクレーパーなど小型のものが多く、大型の剝片は少ない。したがって、もちこまれた素材（原石）の数は多くなく、大きさも小さいものであったとみることができると推定される。このことからみて、姫島産黒曜石は、姫島から直接持ちこまれたものではなく、瀬戸内海沿岸の遺跡を経て間接的に熊野台地へもちこまれたものと推定される。

東深原遺跡採集の局部磨製石斧は、現在までのところ広島県では類例がない。中・四国地方でみると愛媛県上黒岩岩陰遺跡<sup>(28)</sup>、高知県不動が岩洞穴遺跡<sup>(29)</sup>などから出土しており、ここでは、有茎尖頭器や隆線文土器と伴出している。また、局部磨製石斧ではないが、打製の円鑿形石斧は、山口県宇部市前田遺跡<sup>(30)</sup>や岡山県久米町の領家遺跡<sup>(31)</sup>で出土している。これらの石斧については、小田静夫氏や岡本東三氏<sup>(32)</sup>の分類があり、いずれも旧石器時代末から縄文時代初頭の時期に位置づけられている。東深原遺跡出土石斧も形態からほぼ同時期のものとみられるが、研

磨の範囲が刃部から表裏背面部、さらに側面にまで及ぶものがみられることからすると、磨製技術が一段と進歩した段階のものとみることができ、やや新しい形態のものといえるのかもしれない。二点が並ぶようにして発見されたことからも、集積されたものであろうか。

ハグイ原遺跡、畦地遺跡では有茎尖頭器が採集されている。広島周辺において有茎尖頭器の出土地は、広島市佐東町中本、佐伯郡五日市町円明寺遺跡、同町三宅、佐伯町法殿平、呉市焼山町泉、東広島市志和町阿原、西条町西ガガラ遺跡などがある。いずれも単独出土のため所属の時期については明確にできないが、帝釈馬渡岩陰遺跡第4層<sup>(41)</sup>などでの出土例からみて旧石器時代末から縄文時代初頭に位置づけられるものが多い。有茎尖頭器には、基部に逆刺をもち平行剝離によって仕上げられたものと基部に逆刺をもち逆二等辺三角形につくり出されたもの<sup>(42)</sup>があり、前者が土器出現以前に位置づけられ、後者は土器と共存する可能性がよいと推定されている。ハグイ原例は、基部に逆刺を有し、平行剝離で仕上げられていることから土器出現以前のもの<sup>(43)</sup>と推定される。また、畦地例は、基部に逆刺をもち、逆二等辺三角形を呈し、調整も粗いことからハグイ原例より新しく位置づけられるのであろう。畦地遺跡では、押型文土器文化期の特徴をもつ石鏃も採集されており、尖頭器の所属時期は、縄文早期ごろに推定される。

このほか、道上遺跡、柳ノ本遺跡からは、縄文時代の石器、剝片類のなかに、姫島産黒曜石とは異なる漆黒色をなす黒曜石が一点ずつ含まれている。石材の原産地分析によれば、島根県隠岐島の久見産出の黒曜石とされるものである。また、道上遺跡出土の縄文式土器には、器表に隆帯のめぐらされたものがあるが、文様からみて九州轟式系統の土器であらう。

このように、いまのところ熊野町採集の石器時代遺物をみると、九州的文化の影響を強く受けていたことが推定され、九州地域とかなり密接な交易があったことが想定できよう。そしてまた、これらの遺跡が、標高二〇〇〜二五〇メートル前後の熊野盆地の縁辺で、盆地への入口部や熊野川や二河川およびそれらの支流の形成した沖積地を前面にのぞむ小高い場所に位置するものが多いことは、当時の生活が、狩猟や木の実などの採集に便利な場所につくられた集落を根拠にしていたことを物語るものであろう。

#### おわりに

本稿は、昭和五八年一二月の安芸郡熊野町史編集委員会研究会および昭和五九年二月の熊野町文化財講座で発表した内容を骨子とし、その後収集した考古資料を含めて作成したものである。本文でも述べたように遺物はすべて表面採集されたものであり、所属の時期については、今後の調査の進展を待つて改めて検討しなおすべき余地がある。この意味からもいくつかの遺跡については、できれば試掘調査などを実施して、遺跡の規模や内容等を明らかにすることが必要となろう。そして、このことはまた、遺跡、遺物の保存と活用の計画を立案するための基礎資料となるものであろう。文化財の保存と活用について、町当局の英断を要望しておきたい。

最後になりましたが、本稿発表の機会を与えられた熊野町・熊野町史編集委員会（委員長三上嘉明広島大学名誉教授）の諸先生方に対し厚く御礼申し上げます。

（昭和五九年四月七日稿）

註

- (1) 広島県『土地分類基本調査—海田市—』一九七七年。
- (2) 潮見浩先生作成原図による。  
田口稔「原始文化の萌芽」『呉市史』第一卷 呉市役所 一九五六年。
- (3) 河瀬正利編『郷原遺跡発掘調査報告』、呉市文化財資料シリーズ第一集 呉市教育委員会 一九七一年。
- (4) 広島県教育委員会『広島県埋蔵文化財包蔵地地名表』一九六一年。
- (5) 文化庁監修『全国遺跡地図』34 広島県 国土地理協会 一九八三年。
- (6) このなかには、剥片やチップのみの出土地（四か所以上）は含まれていない。
- (7) 岡遺跡発掘調査団（担当山県元安芸府中高校教諭）による調査。
- (8) 形態からみると一側縁に刃潰し加工の施された後期旧石器時代のナイフ形石器に似るが、姫島産黒曜石製であることからみて縄文時代の剥片石器としておく。
- (9) 藤田憲司・間壁葎子・間壁忠彦「羽島貝塚の資料」『倉敷考古館研究集報』第一一〇号、四二～六六頁 一九七五年。
- (10) 間壁忠彦・間壁葎子「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第七号 一九七一年。
- (11) 前掲註(3)に同じ。
- (12) 潮見浩「月崎遺跡」『宇部の遺跡』三八～七〇頁 宇部市教育委員会 一九六八年。
- (13) 山口県教育委員会『神田遺跡第一次発掘調査概報』一九七一年。  
山口県教育委員会『神田遺跡第二次発掘調査概報』一九七二年。  
山口県教育委員会『神田遺跡76第五次調査概報』一九七七年。
- (14) 前島高雄「黒島浜遺跡」『山口県先史時代採遺物集成ならびにその編年的研究』周陽考古学研究所報 I 六四～七四頁 一九七八年。



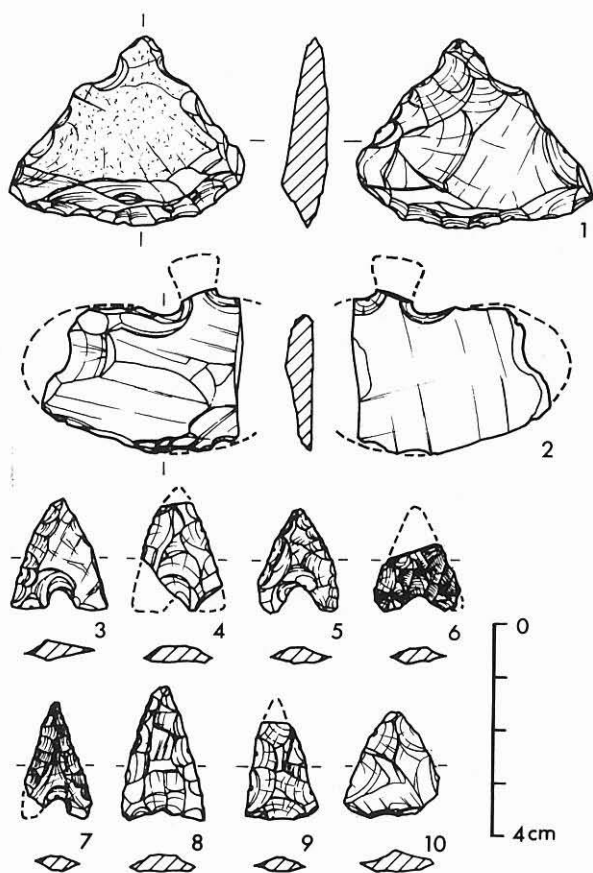
- (15) 潮見浩・川越哲志・河瀬正利「広島県尾道市太田貝塚発掘調査報告」『広島県文化財調査報告』第九集 一〇五頁 広島県教育委員会 一九七一年。
- (16) 潮見浩「帝釈観音堂洞窟遺跡の第二次・第三次・第四次調査」『帝釈峽遺跡群の調査研究』3 一九六五年度～一九六七年度 一四〇～二〇頁 一九六八年。
- (17) 藤野次史氏の教示による。
- (18) 松本雅明・富堅卯三郎「縄式土器の編年」『考古学雑誌』第四七巻 第三号 一〇二～一〇六頁 一九六一年。
- (19) 沖村雄二先生の御教示による。流紋岩は、熊野台地、賀茂台地周辺にはひろく分布しており、石器石材の供給は、近くからできたであろう。
- (20) 河瀬正利編「円明寺(延命寺)遺跡発掘調査報告」広島県教育委員会 一九七一年。
- (21) 今田三哲ほか「地御前南遺跡の概報」『廿日市の文化』第一一・一二集 二二〇～二二九頁 一九七三年。
- 河瀬正利「広島県佐伯郡廿日市町地御前南遺跡の遺物について」『広島大学文学部帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』Ⅶ 六五～八六頁 一九八四年。
- (22) 中越利夫氏の教示による。
- (23) 島立桂ほか「広島県佐伯郡五日市町観音地区の遺物」『続トレンチ』第六巻 第三号 三二〇～三五五頁 一九八四年。
- (24) 中越利夫「広島県佐伯郡佐伯町越峠遺跡出土の遺物について」『広島大学文学部帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』Ⅵ 八三～一〇六頁 一九八三年。
- (25) 河瀬正利「畝観音免古墳群」広島県安芸郡海田町教育委員会 一九七九年。
- (26) 前掲註(3)に同じ。
- 藁科哲男・東村武信氏によれば、郷原遺跡出土の石器には、香川県金山産出の安山岩のほか、姫島産出、佐賀県腰岳産出および島根県隠岐島(久見)産出の黒曜石が含まれているとされている。

- 薬科哲男・東村武信「帝釈観音堂洞窟遺跡出土のサヌカイト、黒曜石遺物の産地推定」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』Ⅵ 六七～八二頁 一九八三年。
- (27) 瀬戸内北岸地域における姫島産黒曜石の出土地についてまとめたものとしてはつぎの文献がある。
- 潮見浩「石器石材としての姫島産黒曜石をめぐる」『内海文化研究紀要』第八号 四三～五九頁 一九八〇年。
- (28) 岡本健児・江坂輝弥・西田栄「愛媛県上黒岩岩陰」『日本の洞穴遺跡』二二四～二三六頁 一九六七年。
- (29) 岡本健児・片岡鷹介「高知県不動ヶ岩屋洞穴」『日本の洞穴遺跡』二二六～二五〇頁 一九六七年。
- (30) 小野忠熙「東岐波前田発見の握斧」『字部の遺跡』一九三～一九四頁 一九六八年。
- (31) 栗野克己ほか「領家遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8 岡山県教育委員会 二二九～四〇〇頁 一九七五年。
- (32) 小田静夫「日本最古の磨製石斧」『季刊どるめん』11 九六～一〇九頁 一九七六年。
- (33) 岡本東三「神子柴・長者久保文化について」『研究論集』Ⅴ 奈良国立文化財研究所学報 第三五冊 一～五七頁 一九七九年。
- (34) 広島大学文学部所蔵資料による。
- 河瀬正利「歴史のあけぼの」『高陽町史』一～九二頁 広島市役所 一九七九年。
- (35) 前掲註(20)に同じ。
- (36) 川越哲志氏採集資料 川越哲志氏の教示による。
- (37) 広島大学文学部所蔵資料。
- (38) 前掲註(2)に同じ。
- (39) 小都隆「東広島市志和町阿原出土の有舌尖頭器」『芸備』第三集 二七～二八頁 一九七五年。
- (40) 藤野次史「ガガラ山西麓地区の予備調査」『広島大学統合移転地理蔵文化財発掘調査年報』Ⅲ 七～一六頁 一九八四年。
- (41) 潮見浩「帝釈馬渡岩陰遺跡の第一次、第二次調査」『帝釈峡遺跡群の調査研究』1 一九六一年～一九六三年度 一～一七

(42) 白石浩之「先土器終末から縄文章創期前半の尖頭器について(上)(下)」『考古学ジャーナル』七、一三頁 一九七六年

二二六、五、一二頁 一二七、

(追記) 成稿後、道上遺跡において縄文時代の石匙いしぎ二点と石鏃類が採集された。石匙(付図1・2)は、いずれ



付図 道上遺跡の石器

も横形のもので、上端のつまみ部と下端の刃部のみに調整が加えられており、両面の大部分は、自然面や主要剝離面が残っている。動物の解体、調理用として使用されたものであろう。石鏃(3~10)は第3図で紹介したものと形態的に大きな違いはない。

また、道上遺跡・柳

ノ本遺跡出土の石器石材の産地分析によれば、黒曜石は、大分県姫島産出のもの（乳灰色）と島根県隠岐島の久見産出のもの（漆黒色）を含んでおり、安山岩では、道上遺跡出土のものには、香川県の金山東産出のものと広島県の冠山東産出のものがある。また、柳ノ本遺跡出土の安山岩には、香川県五色台（白峰）産と冠山東産、それに日群と呼称されている現在のところ原産地の不明のものが含まれていることがみとめられている。

なお、熊野町教育委員会では、昭和五九年度において町内の主要な遺跡の分布試掘調査を実施されることになっている。これにより今回紹介した遺跡の範囲や内容などの一端が少しでも明らかにされることを期待したい。

付表 道上遺跡の石器

付図 番号	種 別	長さ (cm) ( )は推定	幅 (cm) ( )は推定	現存 (g) 重量	石 材	備 考
1	石 匙	3.5	4.4	10.0	安 山 岩	背面に自然面のこる 横長剥片、側辺調整
2	〃	(3.8)		6.6	〃	腹面に主剝離面のこる 側辺調整
3	石 鏃	2.1	1.8	1.0	〃	側辺調整、両面に素材 面と主剝離面がのこる
4	〃	(2.4)	(1.7)	0.8	〃	両面加工、側辺調整
5	〃	2.0	1.5	0.7	〃	両面加工、全面剝離
6	〃	(2.0)	(1.7)	0.5	黒曜石(隠岐・久見)	両面加工、全面剝離
7	〃	2.2	(1.3)	0.5	黒曜石(姫島)	〃
8	〃	2.5	1.6	1.0	安 山 岩	〃
9	〃	(2.2)	1.4	0.7	〃	〃
10	〃	2.0	1.8	1.1	〃	未成品か

# 〔熊野町史編集委員会および同調査委員会名簿〕

◎三 上 嘉 明 (広島大学名誉教授、日本近代史)

○山 中 寿 夫 (文教女子大教授、日本近世史)

○神 鳥 武 彦 (広島大学学校教育学部教授、国語学(方言))

押 部 佳 周 (広島大学学校教育学部教授、日本古代史・中世史)

小 野 忠 熙 (元広島大学学校教育学部教授、地理学(地形))

河 瀬 正 利 (広島大学文学部講師、考古学)

北 川 建 次 (広島大学学校教育学部教授、地理学(人文地理))

佐 中 忠 司 (広島大学学校教育学部助教授、経済学)

柴 原 健 児 (広島大学附属東雲中学校教諭、社会科)

友 久 武 文 (広島女子大学教授、国文学)

中 西 稔 (広島大学学校教育学部助教授、植物学)

藤 井 千 之 助 (広島大学学校教育学部教授、社会科教育)

星 野 英 一 (広島県立海田高校教諭、日本史)

水 岡 繁 登 (広島大学学校教育学部教授、動物学)

吉 村 典 久 (広島大学学校教育学部教授、地質学)

◎印 熊野町史編集委員会委員長 ○印 同編集委員、他は同調査委員 (アイウエオ順)

# 熊野町史刊行委員

荒谷 真治郎 中央公民館長 熊野町郷土史研究会長

福岡 孝義 西公民館長 民俗芸能研究家

織田 信 民俗資料研究家

中原 明雄 民俗資料研究家

梶山 孟 榺山神社宮司

猪野 了周 西光寺住職

石山 徹春 光教坊住職

熊野の歴史

〔研究ノート・第2号〕

昭和五十九年九月十日発行

非売品

編集 熊野町史編集委員会  
発行 熊野町

(Tel 85451121)

印刷 広島紙業株式会社